恐怖のホルタル

知らないということは恐ろしい。わたしの知らない間にバングラデシュは大変な事態に陥っていたのである。それはバングラデシュ特有のホルタルという過激な政治的抗議活動のことである。

政治的な抗議行動といっても抗議集会を開いたり、デモを組織したりするくらいなら大したことはないが、この国ではホルタルの間にたくさんの人が殺されるのである。大規模な暴動によって殺されるのではない。見せしめのために、不特定の人間が闇討ち的に何人も殺されるのだからたまらない。

ホルタルについて語るにはバングラデシュの歴史と政治状況をまず知らなければならない。現在この国では大統領を元首とする議院内閣制がしかれており、アワミ連盟と民族主義党（ＢＮＰ）という二大政党が政権を争っている。議会は一院制で任期は五年である。

軍政から民政に移行し、選挙が実施されるようになった一九九一年から民族主義党、その次がアワミ連盟、そして再び民族主義党と政権が変わり、二〇〇九年の選挙と二〇一四年の選挙でアワミ連盟が連勝し、いま政権の座に就いている。

二〇一四年の選挙は、民族主義党が選挙をボイコットし、イスラム原理主義を掲げるジャマティ・イスラム党も締め出されたため23パーセントの低投票率のままアワミ連盟の圧勝に終わった。

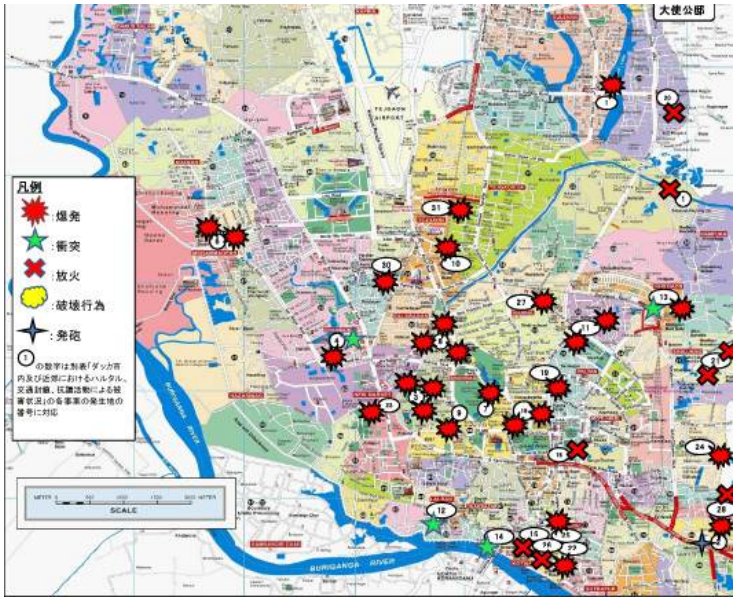
民族主義党は候補を擁立しなかったので、三百選挙区のうち過半数の百五十三議席が無投票で決まってしまい、アワミ連盟は二百三十二議席を確保して圧勝した。民族主義党はこの選挙のやり直しを主張しているのである。

ホルタルはどちらが野党になっても起こる。今回は昨年一月の選挙に敗れた民族主義党が中心となり昨年の九月から始まったという。野党がホルタルの実施を宣告すると、多くの企業で、従業員の外出自粛令が出され、商店なども店を閉める。

特に激しいのは交通機関への攻撃のようだ。道路を封鎖したり、バスや乗用車を鉄パイプで襲ったり、火炎瓶や手作り爆弾で火を放ったりといった危険極まりない暴力行為が国内あちこちで発生するためだ。新聞によれば一月中だけで全国で六十八人が亡くなったという。

抑え込んでいるらしいが、それでも日本大使館のホームページを見ると、ゲリラ的にあちこちで放火や殺人が起きている。軍隊や警察力の手薄な地方はさらにひどい状況らしい。

こんなことを半年も続けていれば、経



済がおかしくなるのは当然だ。物流がマヒするため、地方から野菜や魚などが都市部へ運べない、乾季で涼しい観光シーズンなのに観光客は来ない、会議や見本市は相次いで中止、工業生産は納期に間に合わないなどの影響が深刻なのだ。

ホルタルを実施すると逮捕者が出る。それに抗議してホルタルを実施し、また逮捕者が出る。この繰り返しでホルタルは延々と続くのである。ガイドのミランに野党連合の政治的主張は何なのか聞いてみたのだが要領を得ない。彼によれば両政党の女性党首の憎しみ合いがそもそもの原因だという。

現在、政権を握っているアワミ連盟のシェイク・ハシナ首相は「独立の父」とされるムジブル・ラフマンの長女で、一九七五年に父が軍の青年将校らに暗殺された際にイギリスにいて生き残った。この事件を裏で指揮したのが軍の英雄ジアウル・ラフマン陸軍少将だった。彼はこのクーデター後、政権を掌握し民族主義党（ＢＮＰ）を創設する。

しかし因果は巡る。一九八一年、ジアウル・ラフマンも軍のクーデターにより暗殺される。現在の民族主義党のカレダ・ジア党首はジアウル・ラフマン元大統領の未亡人なのである。つまり両党首とも、悲劇の大統領の親族なのだが、とくにハシナ首相にとってみれば、カレダ・ジア党首は自分の父を暗殺した男の妻ということになる。

こんなエピソードがある。八月十五日は独立の父ムジブル・ラフマンが暗殺された日で、アワミ・連盟が政権を握っていた時期は国民が喪に服す日だった。しかし民族主義党が政権を取ると。カレダ・ジア党首は八月十五日は自分の誕生日だから祝日にすると言いだしたのだ。女の執念は怖い。二人の女性党首の憎しみ合いは、外から見ると喜劇的だが、こんな情緒的問題が政治の根底に横たわり、非生産的な衝突、確執を繰り返しているのでは民衆はたまったものではない。

さらに政治家や役人の汚職もすさまじいらしい。ダッカのコンビニでたまたま出会ったクルミッド・アルミハーさんは、日本への留学経験もある建築設計家で、コンサルタント会社を経営する実業家だが、彼によればバングラデシュの汚職は世界一だそうだ。汚職に関し調査を行っているトランスペアレンシー・インターナショナル（Transparency International）というＮＧＯは、二〇〇一年から五年連続で、

バングラデシュは世界でもっとも汚職が蔓延している国であるとする調査結果を発表した。

アルミハーさんは、留学後も日本の大手設計事務所で経験を積み、六年前に母国に帰国したという日本びいきである。久しぶりに日本人を目にして、思わず日本語で話しかけたという訳だ。昼食に招待したいという彼の誘いに応じて、コンビニにほど近い自宅を訪問することになった。

「アルミハーさん、ホルタルについてバングラデシュの人はどう考えているんですか。ホルタルは支持されているんですか」

「とんでもない。ほとんどの人は迷惑がっています。経済へも大きな打撃です。一部の過激な連中がやっているんです。時には貧しい人に金を渡して実行させることもあるようです」

「あなたはアワミ連盟の支持者ですか」

「私はどの政党も支持しません。選挙も投票したことがありません。権力を握った方が甘い汁を吸う、それだけです」

「しかしバングラデシュはここ数年、平均して6パーセント前後の高い経済成長率を達成しています。これはシェイク・ハシナ首相の政治が、成功しているからではないんですか」

「政治家がいなければもっと高い成長率を記録していたでしょう。この国のガバナンスは経済にとってマイナスです。なにもしない方がましです。外国からの多額の援助も、穴の開いたゴムホースに水を流すように途中で漏れ出してしまいます」

アルミハーさんは日本語で政治や経済の話をしたことがないので、適当な単語が見つからないと言いながらも、久しぶりの日本語の会話を喜んでいるようだった。

彼は大学院卒で自分の会社を経営し、高級マンション住んでメイドを雇う、若

きエリートである。その彼が自国の政治に絶望していることを知って、私も暗澹たる気分にならざるを得なかった。

バングラデシュは、制度上は議院内閣制で民主主義体制の国だ。だが選挙では有権者への目先の利益誘導が優先され、立候補者同士で具体的な政策が議論されるような機会はほとんどないという。

また、議会において政策上の意見が戦わされることも稀で、意見の衝突があると議会ボイコットやホルタルといった暴力的な手段がすぐに使われる。バングラデシュが近隣のアジアの国々に比べて経済的に立ち遅れているのは、このような政治の貧しさが原因になっていることは間違いない。

ダッカの日本大使館のホームページを見ると、「不測の事態に巻き込まれないよう外出の是非について十分慎重に検討するようお願いいたします。仮に外出する際は、いつでも、どこでも被害に遭う危険性があるということを改めて認識の上、細心の注意を払って行動してください」

とある。

「一応注意はしたから、あとは何が起こっても知らんからね」といった、木で鼻をくくったような態度だが、わたしももとよりお国の保護などを期待している訳ではないから、「あっ、そう」という感じしかしない。

しかし、せっかく旅行に来て、ホテルの部屋に閉じこもっているばかりという訳にはいかない。地方に散在する豊かな自然や歴史的遺産を訪ねたいし、田舎に住み人たちの暮らしぶりやマイクロファイナンスの実態をこの目で見てみたいのだ。

ミランによれば一番危ないのが四輪の乗用車だという。乗用車は庶民が所有していることはまれで、政府の役人や富裕層が乗っていることが多いから真っ先に狙われるらしい。商用車も同様だという。そもそもホルタルの期間は旅行会社もレンタカー会社も車を貸したがないし、運転手もなかなか見つからないという。

仕方がないので、比較的安全だと思われる列車や、水路を行く船を使って地方へ移動し、近距離の移動はリキシャやCNGを使うことにした。新聞には何者かがレールを剥がして列車を転覆させた記事や、仕掛けられた爆発物によって客船が炎上している写真が掲載されていたが、こんなことが毎日起きている訳ではない。まず一番安全と思われる水路を行く船旅を勧められたので、世界一のマングローブ林で世界遺産にも指定されているシュンドルボンを目指すことにした。

ロケットスティーマー

バングラデシュ南部は大河が作るデルタ地帯で、何百キロにもわたって水路が網の目のようにつながっている。ガンジス河やプラマプトラ河といった大河が北から南に流れるだけでなく、その大河を東西につなぐ大小の河川が毛細血管のように走っている。この水路を利用して、首都ダッカと南部の地方を結ぶ水運が発達し、定期便も数多く運行されているのだ。

私が目指したのはシュンドルボン観光の拠点であるモングラという町だ。パシュール川というガンジス河の支流の河港の町である。この町でシュンドルボンを訪ねるための船をチャーターするのだ。

ダッカとモングラとは三百キロほど離れていて、長距離バスを利用すれば八時間ほどかかる。バスの狭い座席に座って八時間は辛いが、船旅なら時間がかかっても手足を伸ばせるところがいい。

ロケットスティーマーと呼ばれる定期便の客船がダッカと目的地モングラを結んでいる。川風に吹かれながら一杯やるのが楽しみだし、列車やバスと違って振動もない。寝ているうちに目的地に着くというのもいい。

ロケットスティーマーというのは、イギリス統治時代に建造された外輪船である。外輪船などというものは前世期の遺物で、私は東京ディズニーランドのアトラクション用のものを見たことがあるが、これは本物のミニチュアサイズを池に浮かべただけ。アメリカのミシシッピ川で観光客用に外輪船が運行されているという話を聞いたことがあるが、定期便で公共交通機関として運航されているのは世界でここだけだろう。

船はダッカ市内観光ですでに訪れたシ

ョッドル・ガットの船着き場から夕方の六時に出る。わたしが乗ったのはテルン号という国営水運会社が運行する船である。一九三五年に建造された客船で、外観からは老朽化がはなはだしい。茶色い鉄板をつぎはぎしたような船体で、客船らしき華やかさはどこにもない。途中で故障したまま動かなくなる恐れがなきにしもあらずと心配になる。しかし、外洋を行く訳ではないから、沈没してもなんとかなるだろうと、腹をくくって乗船した。

船内に入ると、まず目に入ったのが船倉中央にある巨大な機関室。動力はさすがに蒸気機関（スティーマー）からジーゼル機関に取りかえられている。機関室の屋根に当たる部分が三等デッキで、板敷きの床の上に毛布やビニールシートを敷いて座っている人がすでに大勢いる。男女は同室で、夜は雑魚寝となる。三等デッキの後部には売店があり、ジュース類やスナックが売られていた。

一等船室は二階の船首部にあり、エアコンと扇風機付きのツインベッドの個室だ。大きな窓から外が眺められるし、手洗いも付いている。ベッドには真白い清潔なシーツが敷かれているのもうれしい。

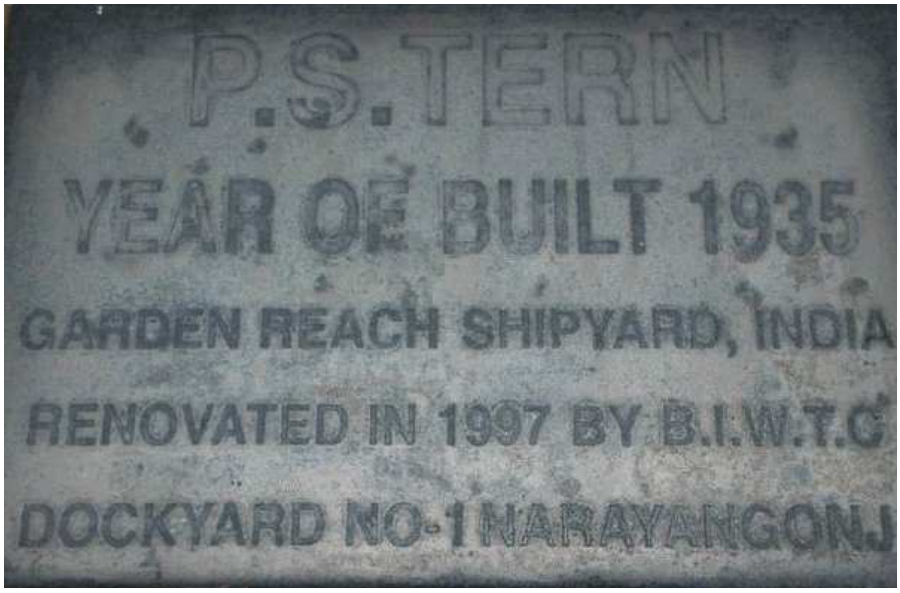
一等船室には専用の船首展望デッキとダイニングルームが付いており、お茶や食事を楽しむことができる。トイレとシャワーも専用だ。この日、八室ある一等船室を利用したのはわたし一人だけである。乗船早々、夕食用に持ち込んだビー

ルを、食堂の冷蔵庫で冷やしてもらうよう頼んでおいた。

一息ついて、船首の一等船室客専用のデッキに出てみると、埠頭にはわたしが乗り込んだ船だけでなく、各地に向かう船が一列に並ぶように何隻も係留されている。そして埠頭は、これから船に乗り込もうとする乗客と、別れを惜しむ見送りの人と、乗客に食べ物などを売り込もうとするもの売りとが入り混じって、ラッシュアワーのＪＲのホームのようだ。

物売りたちは喧騒に負けまいと声を張り上げ、荷物運びの若者は怒声を上げながら人込みを縫って行く。車のクラクションの音に紛れて夕方の礼拝を呼び掛けるアザーンの声が聞こえてくる。出航前の港はまさしく喧騒のるつぼだ。

テルン号は定刻より一時間遅れの七時頃、音もなく岸壁を離れ、ゆっくりとボッダ河を下り始めた。すでに日は没し、わずかに明るさを残す雲が前方に横たわっている。日中は縦横無尽に行き交っていた小舟も、いまは数が少なく、暗い川面に溶け込むように黒い影を落としている。船はロケットという名前がつくわりには、ゆっくりとダッカの街の灯から遠ざかって行った。



シャワー室で街歩きの汗を流し、船室に戻ると、客室係が夕食の注文を取りにきた。ボーイといいたいが、頬から顎にかけての髭は真っ白で、七十歳は超えているだろう。片脚を少し引きずって歩くので、西部劇の名作「リオ・ブラボー」で、片脚の不自由な牢番スタンピーを演じたウォルター・ブレナンを思い出した。

「この船にはもう何年も乗っているのかね」

「三十年を超えたかな。この船だけじゃぁなく、他の船にも乗っているよ。船がわしの住みかみたいなものさ」

「他の船というと？」

「この航路は四隻の船が就航してるんでさ。マスッド号、レプチャ号、オストリ

ッチ号、それにこのテルン号でさ。四隻が変わり番こに週六便ね。だけど最近はわしと同じで、ガタがきてるからよく運休するけどな」

「料理はあんたが作るのかね」

「専門のコックが作ったやつを積みこむのさ。ワシは温めて、サービスするだけ。イギリス風とバングラデシュ風があるがどっちがいいかね」

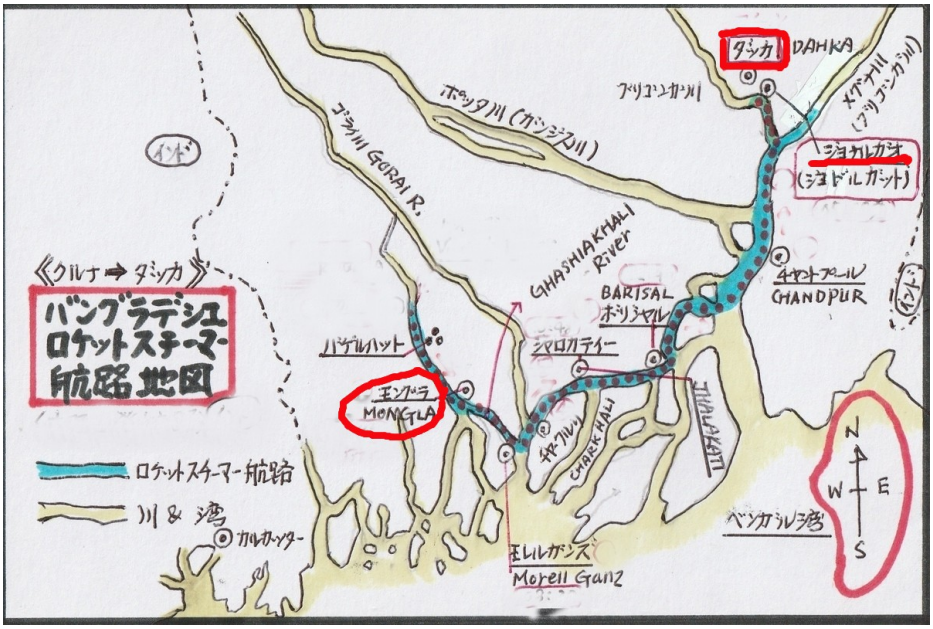
私はバングラデシュ風、ガイドのミランはイギリス風を注文したが、卵カレー、野菜カレー、チキンカレーは同じで、違うのはビリヤニという炊き込みご飯かトーストの差だけだという。二人しかいないから、面倒くさがって同じものにしてしまったというのがミランの解釈だ。

しかしカレーの味は上々で、冷蔵庫に預けていたビールも十分に冷えている。イスラムの国で大っぴらに酒を飲んでいると眉をひそめられかねないような気がして、なんとなく気兼ねするが、今夜は他の客がいないから気楽だ。

食事の後は船首の展望デッキを独り占めして、滑るように進む船足を感じながら、満天の星を眺めるのもおつなものだ。酒に火照った頬に風が気持ちよく、時折現れる両岸の人家の灯りが旅愁を誘う。ブレナン老人が、熱い紅茶とクッキーを運んできてくれた。豪華客船には乗ったことがないが、わたしには船賃三千円のこの船旅で十分だ。

テルン号は何ヵ所かの河港に立ち寄り、

そ



のつど乗客と荷物を積み下ろししながら、翌日の昼ごろにモングラに着いた。

シュンドルボンを目指して

シュンドルボンは世界最大のマングローブ天然林で、ベンガル語で美しい森を意味する。モングラからシュンドルボンを訪れるためには、プライベートの船をチャーターしなければならない。ダッカの旅行代理店を通じて船を手配したが、船の中で二泊三日を過ごす訳だから、どんな船なのか、実際にこの目で見るまでは心配だった。

寝るスペースは十分なのか、トイレはあるのか、食事は温かいものが食べられるのか、ガイドのミランに聞いても「大丈夫、心配ない」というだけだ。彼も船を見た訳ではないからそういうしかないのだろう。わたしが想像していたのは、ダッカからの船旅でたびたび出会った古びた木造の漁船か、人を満載して岸から岸を往復する渡し船程度の船だ。

しかしモングラの埠頭に係留されている船を一目見て、わたしの心配は杞憂だと分かった。白と青のペンキの色もまだみずみずしい新しい船で、ひとりで貸し切るのは贅沢だと感じるような立派な船である。

さっそく船長が笑顔で出迎えてくれた。小柄だが日に焼けた顔は、竹中直人を精悍にしたような感じの男である。短く刈り込んだ頭髪とは逆に、頬から顎にかけて長いひげを伸ばしている。握手も力強い。デロワと名乗った船長は早速、スタッフを紹介し、船の説明をしてくれた。

「この船はアロッコル号といいます。FRP（ガラス繊維強化プラスティク）製の船で、長さ八十フィート、船幅十五フィートです。シュンドルボン観光のために建造された船で、ツインの客室が四つあり、乗客八人を乗せることができます」

「八人乗りを独りで使うとは贅沢だな。スピードはどのくらい出ますか」

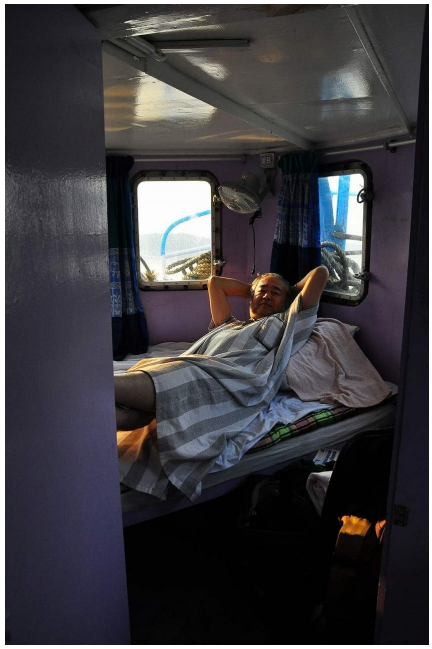
「十ノット（約時速十八キロ）出せます。

今日の停泊地まではおよそ五時間で、陽の沈む前には着きます」

普段から外国からの団体のツアー客を乗せることが多く、船長は片言の英語を話すことができる。

船長が他のスタッフを紹介してくれたが、機関長、コック、小舟の船頭、雑用係と四人もいる。雑用係のモンドルという青年は、シュンドルボンのネイチャーガイドの資格も持っており、森の動植物について説明してくれるという。また細い水路などに入って行くためには、手漕ぎの小さな船が必要で、その船を操る船頭が同行しているという訳だ。小舟はアロッコル号に係留して、引っ張って行くことになる。

客室はデッキから急な階段を下りたところにあった。二人用の部屋が四室並んでいるが、わたしが使ったのは一番奥の船首部分の部屋だ。船の舳先の形で半円形をした部屋だが、ほぼ三面が窓に囲まれており、船の針路方向が良く見える。部屋の四分の三は大きなダブルベッドが占めているから、使うのは、寝る時と、



デッキでの眺めに飽きて寝転がって本でも読むときだろう。

モンドル青年がビールや酒が詰まった重い私のトランクを、客室に運び込むと、船は間もなく出航した。パシュール川は大河である。川幅は二キロ近くはあるだろう。流れも緩やかである。デロワ船長によれば水深は深いところで三十メートルはあり、バングラデシュでもっとも水深が深い川だという。

操舵室で舵を握るデロワ船長の隣に腰掛け、これからの航海の予定について聞いてみた。

「海までは八十キロ近くあります。今日はシュンドルボンの森の奥深くまで船を進め、夕方には森林管理事務所の近くに停泊します。ミスターは明日の朝早く上陸して、マングローブの林を散策したり、小舟で入り組んだ水路を探検したりすることができます」

「同じ所で二泊するんですか」

「あなたのガイドから、ミスターは河沿いの村の暮らしぶりに興味を持っていると聞いています。明日の午後には停泊地

を発って、村がある場所まで戻って停泊する予定です。そうすれば三日目に村を存分に訪ねることができます」

団体のツアーと違って、船は貸し切りなのだ。ミランには河沿いの村を訪れ、村人の暮らしぶりや農業・漁業の様子をじっくり見てみたいと告げてあった。この地域は二〇〇七年のサイクロンで壊滅的な被害を受けた地域だ。

シュンドルボン沿岸部に上陸したシドルという名のサイクロンは、被災者八万七千人、死者五千人、負傷者五万五千人の被害をもたらした。二〇〇九年のサイクロン・アイラでも五十七万人以上が家屋を失った。洪水、高潮、川岸の浸食、海水侵入、津波といった自然災害が発生しやすい地域なのである。シュンドルボンの自然もさることながら、厳しい生活環境の中で人々がどう生きているのかそれが知りたかった。

モングラの港を出て三十分しないうちに船は小さな桟橋に横付けされた。ここにある森林管理事務所で金を払い、シュンドルボン森林国立公園に入るための許可証をもらうのだ。さらに、驚いたことに銃を持った森林監視官（レンジャー）が船に乗り込んで来た。これからの三日間、われわれに同行するという。

森林監視官の同行が義務付けられているのは、人食いトラの襲撃から我々を守るためだという。さらに、シュンドルボンは人里遠く離れ、沿岸部にあるため、海賊などによる襲撃の恐れもある。しかし、森林監視官はコメディアンの坂上次郎のような愛嬌のある顔で、目がやさしく、銃を使って敵を追い払えるような戦闘的な様子はない。いざという時に本当に役にたつのか、いささか心もとない。ガイドのミランは「地元の雇用対策の意味もあります」耳打ちした。

これで、ガイドのミランも含め、わたしひとりで七人のスタッフを雇ったことになる。人件費の安いバングラデシュだからできることで、日本でこんな贅沢はとてもできない。

ベンガルトラは林の中で働く人たちに恐れられているのは事実だ。生息数は約四百頭と推定されているが、毎年二十人から三十人が襲われて命を落とす。トラは人間の背後から気づかれないように忍び寄り、突然襲うので、避けるのがむずかしいという。ミランはトラに襲われて死んだという記事を新聞で毎年のように目にするという。

「ベンガルトラは絶滅危惧種に指定され

ていてめったに見られないというじゃないか。観光客を呼ぶために少しオーバーに騒ぎ立てているんじゃないかね。あんたは実際見たことがあるのかね」

体長二〜三メートルにもなるというベンガルトラが疾駆する姿をぜひともこの目で見てみたいものだと思い、クマルさんという森林監視官に少し皮肉っぽく聞いてみた。

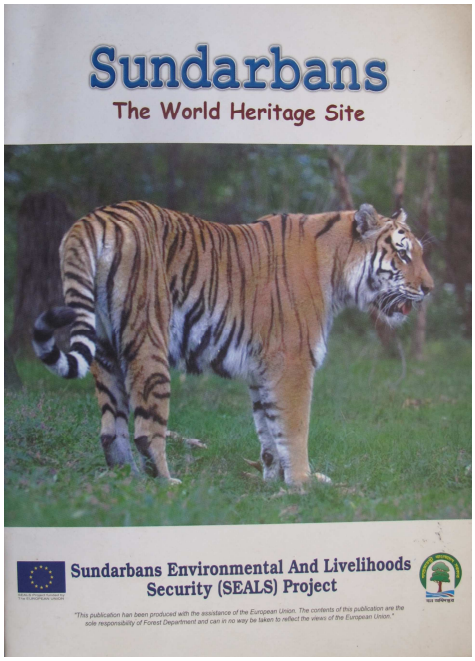
「一日、六回見たことがあるよ。しかし一年間まったく出会わないこともある。トラは警戒心が強いから、人間が大勢来るような場所は避けている。それに一頭がかなり広いなわばりを持っているから出会うチャンスは多くない」

クマルさんによれば、トラを見るチャンスはトラが川を横切る時だという。林の中では木々が密生しているために、姿をとらえるのは容易ではない。トラは泳ぎがとても上手だそうだ。ベンガルトラは水辺で生息する唯一のトラなのだ。

「トラに向けて銃をぶっ放したことはあるのかね」

「追い払うために、威嚇で撃ったことはあるよ。我々にとってトラは神様なんだ。殺すわけにはいかない」

クマルさんは手にした銃をさすりながら、森の方を見やった。昔からこの地方の人々の間では、ベンガルトラを意味する「バーグ」という言葉を口にするのは最大のタブーとされてきた。この名前を



呼ぶと、トラを呼び寄せるというのだ。そのため人々は、代わりに「マムー（おじさん）」という言葉を使い、シュンドルボンの王者として畏怖してきた。

北海道では、ヒグマを怖れ畏み「山おやじ」と表現しているが、同じ理屈であろう。トラやクマは、豊かな恵みをもたらしてくれる自然の象徴であり、時には恐ろしい災いをもたらす聖なる存在なのだ。

しかし最近は密猟が大きな問題らしい。クマルさんは密猟者と撃ち合いになったこともあるという。

「去年の今頃、地元の漁師からの通報で、管理時事務所から五人が森に向かい、追い払ったよ。ベンガルトラの皮は敷物として高く売れるし、骨は漢方薬の原料になる。中国人の闇のブローカーが暗躍してるんだ」

クマルさんは、公式発表の四百頭は実際にはいない、せいぜいその半分程度ではないかと考えている。

「トラは一年で五十頭ぐらいのシカを捕獲している。一週間に一頭ぐらい食べな

いと生きて行けないからだ。最近はトラの獲物のシカが、かなりの勢いで増えている。トラが減っている証拠だよ」

日本の北海道にいるヒグマは鮭を捕まえて食べている。トラはネコ科だが、ネコ科の動物は魚を捕るのがうまいことで知られている。シュンドルボンのトラは魚は食べないのか聞いてみたが、クマルさんは首をかしげただけだった

トラ談義を楽しんでいるうちに、船は広い川幅を持つパシュール川から、大きく左に舵を取って、枝分かれするように伸びるセラ川に入って行った。パシュール河は幅二キロはあろうかという大河だが、セラ川の川幅も四百メートルぐらいはある。

パシュール川とセラ川に挟まれた狭い砂州のような場所には、掘立小屋のようなみすぼらしい家が軒を並べているのが見える。浜には小さな船が何艘も引き上げられているから、漁師の村だろう。砂浜で子供たちが遊んでいた。

「モンドル君、あの村は漁師の村かね」

「はい、ジョイモニー村といいます。主

にエビ漁をしている人たちが住んでいますが、州政府は、あそこは危険なので居住を認めていません」

「あの村の奥に見える巨大な建物は何だね。まだ建築中みたいだが」

「あれは外国から輸入した小麦やメイズを入れる備蓄倉庫です。あそこまで船で持ってきて、船から直接、倉庫に入れられるようになっています。政府が建てていますが、日本からの資金援助もあると聞いています」

ニッパヤシで葺いただけの掘立小屋と、コンクリートの巨大なサイロはあまりにも異質だ。村の人たちはあの近代的な建物をどんな気持ちで眺めているのか。村の人たちはどんな生活を営んでいるのか、帰りにはジョイモニー村にぜひとも立ち寄ってみたい。

セラ川をしばらく進むと、人家はほとんど見かけなくなった。川の流れはどちらを向いているのか分からないほど緩やかだ。川の両岸はマングローブの林に覆われていて、鏡のような水面にその影を落としている。木々の枝には、鳥がとまって川面をにらんでいるし、水辺では猿や鹿がのんびり遊んでいる。

水際に羽のように葉を広げたニッパ椰子の茂みを見つけた。バングラデシュでは「ゴルパタ」と呼ぶそうだ。すぐ近くにはゴルパタを満載した船も泊まっている。ゴルパタはバングラデシュの住居の屋根材や壁材として広く利用されている。骨組みを竹で作り、ニッパ椰子の葉で葺

いただけの粗末な家だ。しかし軽いうえに繊維が多くて風雨に強く、風通しも良いため、暑いうえに湿度が高いこの地方では重宝される。

モンドル青年によれば、花柄を切り取ると甘い汁がにじみ出てきて、これを採

取して砂糖や酒などを作ることができるし、葉を編んでかごを編むことも行われている。したがってニッパ椰子を採取するためには、管理事務所で金を払って許可証を手に入れる必要がある。

シュンドルボンではニッパ椰子の他にベテルリーフ（ビンロウ）と呼ばれる煙草の葉や薬用になる植物の採集が盛んである。またもっとも有名なのが蜂蜜の採取で、四月から五月にかけてたくさんの人が密林の奥に分け入るのだという。

船が近づく気配を感じたのだろうか、白鷺が大きな羽をはばたかせて木の枝から飛び立った。静寂を破って、ときどきなにかが水面をたたいたような音がするが、そちらの方を見ても波紋が静かに広がるのが見えるだけだ。モンドル青年はボラが跳ねるのだという。

「モンドル君、この辺からベンガル湾まではどのくらいの距離があるのかね」

「出発したモングラから海岸まで約八十キロです。先ほどセラ川に入った辺りまでが約二十キロ、ここから海岸まで六十キロぐらいはあります」

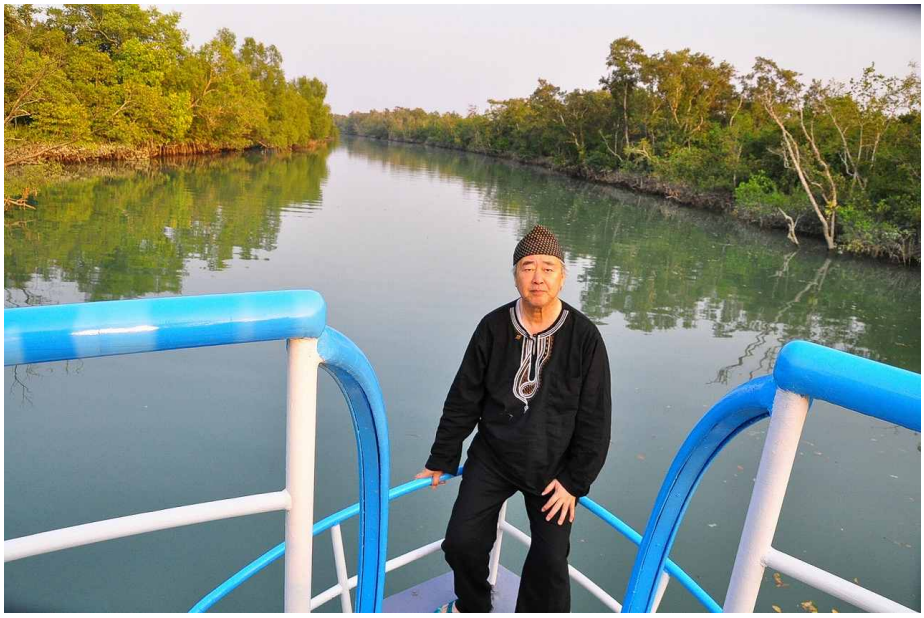
「そうすると、まだ水は淡水かな」

「この辺はすでに汽水域です。後で水をすくって飲んでみてください。すこし塩辛いと思いますよ。乾季のいまは川の水量がすくないため、海水を押し戻す力が弱くなりますので、雨季の時より塩分が高くなります」

川の土手に生えている木の根が大きく露出しているところを見ると、いまは干潮らしい。満潮と干潮の差がかなりあるということだろう。しかし海ほど潮の香は強くない。

船の舳先にあるベンチに腰掛けて、移り行く水路の様子を眺めていると、前方に小さな木造舟を見つけた。四人の若者が乗っている。漁をしているらしい。モンドル青年が魚を買うことができるかもしれないが、どうするかと聞いて来たので、迷わず船を停めるように指示した。

デロワ船長が船のスピードを緩め、若者たちは必死に櫂をこいで船に追い付いてきた。



「おーい、魚があれば買ってやるぞ」

「採れたばかりの新鮮な魚がいろいろありますよ」

四人の若者は三十歳になるかならないかぐらいだろう。ルンギというバングラデシュ風腰巻にピンクのシャツを着た若者がリーダー格らしい。小舟の中央がこんもりと盛り上がっており、ビニールシートを敷いた上に竹むしろが掛けてある。その竹むしろをめくると、大小入り混じってたくさんの魚が見えた。

モンドル青年が三百タカ（約五百円）出してくれるかと聞くので、財布を覗くと百タカ札はなく、五百タカ札が一枚ある。どうせお釣りなど持っていないだろうから、五百タカ分買うように指示した。

モンドルがデッキから大声で若者と交渉を始めたが、話は簡単にまとまった。ピンクシャツの若者がプラスティックの洗面器に大振りな魚六匹を入れて差し出した。カニが一匹だけあるというので、それも買うことにして全部で五百タカだ。若者四人は思いがけず魚が売れて、現金を手に入れたことでうれしそうだった。

ガイドのミランに通訳してもらって話を聞くことにした。

「どこから魚を獲りに来たのかね」

「バゲルハットという町の近くのショロンコラ村から来たんだ」

バゲルハットは世界遺産に指定された古いモスクがある町だ。わたしが出航したモングラの港からさらに四十キロほど河を遡ったところにある。エンジン付きのアロッコル号でもここまで来るのに半日以上かかった。

「そんな遠いところから手で漕いで来たのか。何日もかかるんじゃないのか」

「四人で変わるばんこに漕ぐんだ。三日

近くかかる」
「帰りも三日かかるんだろう。魚が腐ってしまうじゃないか」
「氷を持ってきているから大丈夫。それに帰りはエンジン付きの船に、チップを渡して曳航してもらうんだ」
「今夜はどこに泊まるんだ」
「あなたたちが泊まるコチカーリ森林管理事務所の近くに船を停めます。ところで水が残り少ないんだ。少し分けてもらえませんか」

ミランが差し出されたプラスティクの容器に、デッキの蛇口からの水を満杯にして手渡してやった。彼らは一日千タカの公園入境料を払い、魚が豊富な海岸近くまでやって来る。うまく行けば三万タカほどの漁ができるというが、体力がある若者でないとできない仕事だ。寝ることも含め、一週間ほどはすべて小舟の中で過ごす。船尾には七輪があり、炭が赤く熾きて、鍋が掛けられていたのでタ食の準備中だったようだ。

マングローブで覆われた汽水域は淡水魚と海水魚が入り混じり、豊かな漁場を形成する。水面に落ちた葉は、貝やエビやカニの餌になる。さらにその排泄物は微生物によって分解され、水に溶け出して栄養分となり、植物プランクトンや動物プランクトンを育てる。するとプランクトンを餌にする小魚が集まり、その小魚を狙って大きな魚が集まって来るのだ。

このような食物連鎖は水の中だけではない。シュンドルボンに生息している代表的な動物はシカ百万頭、イノシシ三万頭、サル五万頭、カワウソ二万頭があげられるし、二百五十種の鳥も生息している。食物連鎖を基にして、シュンドルボンは命のゆりかごとなっているのである。

漁師の若者たちの乗った小舟は、私たちの船が今夜の停泊地近くまで曳航してやることになった。小舟は舷側にロープでしっかり固定され、アロッコル号はふたたびゆっくりと走り出した。船を漕ぐ

必要がなくなった若者たちはみんな笑顔で早速、夕食の準備を本格化させた。

船首のデッキに戻ると、前方の水路に一筋、金色に輝く光の帯を落として、いままさに太陽が森の向こうに沈むところだった。空はまだいくらか明るさを残しているが、森は黒く影を溶かしている。船は今日の停泊地へ急ぐのか、少しスピードを上げたようだ。湿気を含んだ風が頬に冷たく感じられ、鋼製のベンチに触れた手がかすかな湿り気を感じた。

聞こえてくるのは、エンジンのかすかな唸りと船が水を切る音だけだ。夕暮れが急速に世界を支配しようとしていた。こんな時は舌を焦がし、胸を熱くする飲み物が欲しくなる。積み重ねた歳月を思い出させるような琥珀色の液体が欲しくなる。

シュンドルボン国立公園の中には十七か所の管理事務所があり、常駐の森林監視官がおり、通信設備も備えている。津波や高潮の難から逃れるためのタワーもある。観光客が乗るクルーズ船は、危険防止のために、いずれかの管理事務所の近くに停泊し、夜を過ごすことになっている。

デロワ船長は船を水路のほぼ真ん中に停めた。両岸までは百メートルほどはある。右岸の森の木々の間から灯りがぽつんと漏れているのが見えるが、それが管理事務所の灯りらしい。エンジンを停め、錨を降ろした船は静かだ。風も波もまったくなく、船は揺れることもない。虫の声もここまでは届かない。気温は二十度℃前後だろう。ホットウィスキーのグラスが手のひらに暖かい。

夕食は先ほど漁師の若者から買った魚のカレーだ。モンドル青年がナイフやフォークをきれいに並べ、食卓を三種類のカレー、ダール豆のスープ、ビリヤニというバングラデシュの炊き込みご飯、トマトときゅうりのサラダが飾った。

我々がカレーと呼んでいる料理はバングラデシュではトルカリと呼ぶ。トルカリは特定の料理を指すのではなく、日本でいえば「おかず」という言葉に近いようだ。

「モンドル君、それじゃあ、魚トルカリとか牛肉トルカリといった風に呼ぶのかな」

「この魚はイリッシュといいますが、イリッシュの後にマスという魚を意味する言葉を付けて、イリッシュマスと呼びます」

モンドルは大きな魚の姿が残る皿を指さして答える。

「イリッシュマスは材料名ですから、これに調理法を示す言葉を付けて、イリッシュマスコライとか、イリッシュマスジョルという風に呼びます。コライはどろっとして濃厚なもの、ジョルは汁っぽいという意味です」

つまりバングラデシュの人は極端にいえば、トルカリしか食べないから、わざわざトルカリと言わない。材料名をいえばそれで十分で、詳しく言う時は〇〇風と後につけるということだろう。今夜の一皿は、クミン、ターメリック、コリアンダー、カルダモンなどの香辛料をたっぷり使い、マスタードオイルでじっくり煮込んである。辛みはあまりなく、爽やかな風味がある。モンドルが言うにはコックさん自慢の一品らしい。

「イリッシュはバングラデシュで一番好まれている魚で、国の魚です。海の魚ですが、産卵のため河に上ってきますので、シュンドルボンではよく獲れます」

「国の魚などというものがあるのが、いかにもバングラデシュらしい、日本人もバングラデシュ人も魚好きだというところは似ている、などと話していると、日本の「国の魚」は何だとモンドルに聞かれた。桜や菊が国花というのは聞いたことがあるが、国魚は聞いたことがない。適当にボニート（かつお）ではないかと答えておいた。（帰国後調べたら、錦鯉だった。モンドル君、ごめん）

食事を終ったときには、船の周囲はすでに密度の濃い夜の闇が垂れ下がって来ていた。わずかに明るさの残る空と川面の間に横たわる森が、二本の黒い帯のように伸びている。

曇っている訳ではないのだが、湿度が高いせいで星明かりもあまり見えない。すべてのものが眠りについた中で、私の乗っている船だけが目を覚ましているような気がする。心地よい満腹感とビールとウィスキーの酔いが、私も眠りにつけと催促していた。

マングローブの森

頭の上から靴音と話し声が聞こえてきて目が覚めた。デッキで船のスタッフたちが朝の準備を始めたようだ。カーテンを引くと朝の光が水底を揺らすように射しこんだ。舷窓から外を見ると、薄い霧がマングローブの森からにじみ出るように水面を覆っている。東の空の雲がかすかに赤くにじんでいるが、陽はまだ昇っていない。

簡単な朝食を済ませた後、小舟に乗り換えてマングローブの森を訪ねることにした。船頭が船尾に立って、長い櫂をゆっくりとしならせると、小舟はすべるように動き出した。

同行するのは坂上次郎風ガードマンのクマルさん、マングローブの森の生態に詳しいモンドル青年、それにミランである。川面は静かな威厳に満ちていて、小舟が作り出す波紋が鏡のような水面に広がって行く。空を見上げると、ボートの上を大きな鷲が音も立てずに舞っていた。

マングローブの森には大小無数の水路が網の目のように走っている。その網の目のひとつに小舟は入って行った。水路の幅は五メートルほどだろうか、両岸の木が頭上に覆いかぶさるように川幅いっぱいに枝を伸ばしている。

モンドルがすぐに私の袖をひっぱり、樹上を指さした。数匹のサルが細い枝に取り付いて、枝が揺れている。アカゲザルだという。ニホンザルと同じぐらいの大きさだ。アカゲザルはバリ島のウブドの森やミャンマーの山地でも出会ったことがある。インド亜大陸から東南アジアにかけて広く分布するサルだ。我々の乗った小舟が近づくと、警戒したのかすばやく森の奥に姿をかくしてしまった。

「モンドル君、連中は何を食べているのかね」

「木の実や葉はしょっちゅう食べていますが、雑食ですから、虫やカニなども食べるようです。水辺でなにかを探しているようなところをよく目にします」

「ここだったら餌には不自由しないだろうな。日本のサルは冬の間は雪が積もる山に住んでいるから餌を得るのに大変なんだよ」

「シュンドルボンのサルたちにとって恵まれていることがあります。汽水域に生育するマングローブは必然的に根から塩分を吸い上げざるを得ませんが、余分な塩分は人間の汗のように葉の表面から

外に排出する機能を持っています。葉の裏に排出された塩の結晶は、サルにとってご馳走で、この結晶をだけを舐めて、葉は捨ててしまう行動が見られます。世界でも珍しいサルの行動でしょう」

モンドル青年は川の土手に落ちているまだ新しい木の葉を指さした。サルが落とした葉は、シカやカニなどがおこぼれにあずかるという訳だ。サルもその住む地域の環境にうまく適合して生きているということだが、塩分の取りすぎで高血圧にならないのか心配になる。しかし、よく考えてみると、サルたちは、わたしと違ってかなり運動もする。「血圧を下げるために運動を」と医者に言われているわたしは、サルの心配をするより自分自身の心配をした方がいい。

緩やかに曲がりくねる細い水路を、垂れ下がった木の枝などをよけながら進んでゆくと、一番気になるのがいろいろな形をした木の根だ。まず最初に目に入ったのが、木の枝からぶら下がるように出ている根だ。地中に根があって、そこから幹が地上に伸び、さらに枝を伸ばして葉が茂るというのが、わたしが持っている樹木の常識だ。しかるに、枝から根が出たのでは、手から脚が生えるみたいな話ではないか。しかしモンドル青年はいつも見慣れた光景なのか、何も言わない。

「モンドル君、あの枝からぶら下がった根みたいなやつは何だ。気持が悪いな」

「あれはエーリアル・ルート（気根）といいます。マングローブが生えている土壌は一日の半分は水をかぶっていますし、泥なので通気性が悪いんです。そこで空気を取り入れるために、地上に補助の根を伸ばして呼吸するんです」

「なるほど、いまは水面から出ているが、満潮のときには先端は水面下になるな。泥に突き刺さったやつもあるぞ」

「根はだんだん延びて、地中に潜ります。そうなると木を支える役割も果たすようになります」

考えてみれば、挿し木から根が出るではないか。木の枝は根に変化する能力を

もともと隠し持っているのかもしれない。
百年間、雨が降らない沙漠で生きている植物もあれば、塩水につかりながら生きている植物もある。長い生命進化の果てに、地表の大部分をいろいろな植物が覆うようになったことは、素晴らしい奇跡ではないか。それによって虫も鳥も我々人類さえもこの地球上で生きていけるようになったのだ。

モンドル青年は、サルやシカなどを見つけて、私を喜ばせようと森の中を目を凝らして探していたのだが、私がマングローブの根に興味を持ったことから、とりあえず樹木について説明しようと方針を変えたようだ。
「気根にはいろいろな種類があります。右手の土手を見てください。地中からVの字を逆さにしたような根が出ていますね。あれは膝を曲げたような形なのでニー・ルート（膝根）と呼ばれています。地中を横に這っている根の一部が湾曲して地上部に顔を出し、気根の役割を果たしています」
「なるほど、通気性を確保すると同時に、幹を支える支柱の役割も果たしている訳だ。涙ぐましい努力だね」
マングローブの樹高は高いもので三十メートルにも達する。地盤の悪い堆積土で自らを支えるための工夫は、通気性を確保するのと同時に大切なサバイバル戦略なのだろう。
モンドル青年が船頭に船を停めるように指示した。
「右手の大きな木の根元を見てください。鉛筆を突き刺したようなものがたくさん見えますね。あれはペンシル・ルートという気根の一つです」
「すると、細い竹の子みたいなやつは大きな木の根の一部で、地下で大きな木とつながっているということかい」

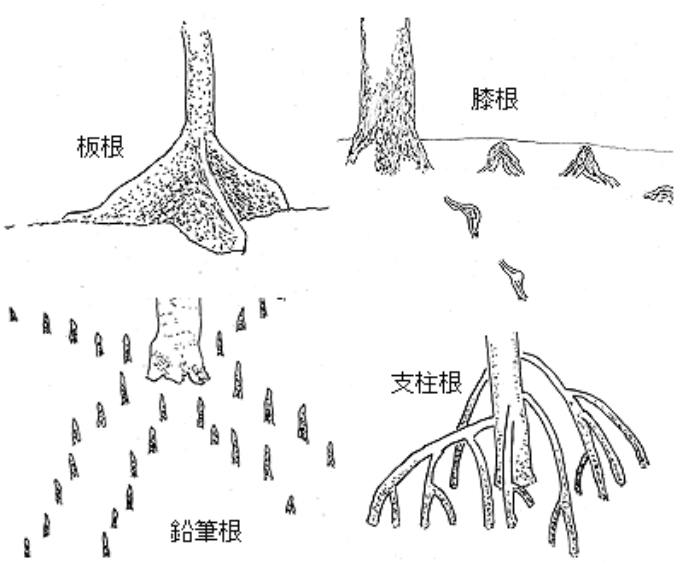
「そうです。一般に根の機能は呼吸と水分や養分の吸収ですが、このペンシル・ルートには葉緑素があり、葉と同様に光合成を行えることが大きな特徴です」

「根は地中で上から下に伸びるものと思っていたけど、下から上に伸びる根もあるんだね。不思議だ」

「空気が通りやすいように、中はスポンジ状になっていますので柔らかくて、サルが良く食べていますよ」

「酸素不足の泥の中で、根が窒息状態にならないようにいろんな工夫をしているんだね」

小舟が進むに従って、水路は次第に細くなる。流れはまったくないのだが、淀んでいる水に特有な腐敗臭は感じられない。土手の泥には、水分をたっぷり含んだ黒い部分と少し白っぽい乾いた部分の境が一本の線になっているのだが、それが満潮時の水位を示している。その高さから見て、干満の差が相当あり、水の入れ替わりがあることが分かる。



シュンドルボンはインドにまたがる大湿地地帯だが、そのバングラデシュ領部分の総面積は約六千平方キロで茨城県の面積とほぼ同じであるが、標高は一メートルから二メートルで、一日二回の満潮時には三分の一が水面下に沈んでしまう。

いまはもっとも潮が引いた時間帯で、水路の水位が低く、幅も狭くなってきたので引き返すことになった。コチカーリ森林管理事務所の近くには小舟が接岸できる桟橋がある。そこから島に上陸し、マングローブの森をこの足で歩いてみることにした。

ベンガルトラ現れる

上陸してすぐ出会ったのは、無残な姿をさらす廃屋だった。二〇〇七年にこの地を襲ったサイクロン・シドルによって破壊された古い管理事務所だ。新しい事務所が建設され、いまは放置されている。私の先に立って歩いていたモンドル青年

は、私の方を振り向くと、廃屋を指さした。

「シドルの時、ここにいた三人のレンジャーが高潮で亡くなりました。新しい事務所は鉄筋コンクリート造りの二階建てで、二階部分が事務所になっています。すぐ近くに避難用のタワーも建設されました」

「日本もよく台風が来るけど、どのくらいの規模だったのかな」

「最低気圧は九四四ヘクトパスカル、最大瞬間風速は七十メートルを記録しています。ここを襲った高潮は五〜六メートルだったと推測されています」

ここには波を防ぐ防波堤もない。海抜二メートルたらずの島では逃げ場所もない。マングローブの森は、葉がほとんど吹きちぎられ、数十万本の木が根こそぎ倒されたという。

当初、森林管理事務所は、サイクロンで倒れた木々を取り除いたり、種を植えたりするなど、マングローブの森の再生計画を検討していた。しかし、専門家から森の自然回復を待つのが最善策との指摘を受け、計画を撤回、森への立ち入りを一切禁止した。しかし一年経つと、数十万本の倒木から新芽が芽吹いていたという。八年経ったいま。マングローブの森には緑が戻り、動物たちの姿がみられるなど、驚異的な回復力を見せている。

なかでもわたしが上陸した島は比較的、動物の生育条件に恵まれており、多くのシカやイノシシがいる。獲物がいれば、それを狙ってベンガルトラもひんぱんに出没する。地元ではここをタイガーポイントと呼んでいるという。

森の奥に入って行くときは、クマルさんが銃を構えて先頭に立った。年に何回もここを訪れるモンドル青年でさえトラには一度も遭ったことがないというのだから、襲われることはないと思うのだが、クマルさんは船の中にいるときとは違った真剣な顔であたりに目を配りながら歩いて行く。

森に一歩踏み込むと、シカとイノシシはすぐ目にすることができた。シカは地元ではチタールと呼ばれているが、これは「斑点のある」という意味だという。背中にたくさんある白い斑点が美しい。イノシシは膝根が一面に顔を出しているあたりで、地面を掘り返すような動きをしていたが、根を食べていたのかもしれない。イノシシは非常に神経質で警戒心が強いので、逃げ足が速い。カメラを構えたときには、すでに森の向こうに逃げ

てゆくところだった。

大木がうっそうと茂る森を抜けると、行く手は突然背の低い灌木の森に変わった。サイクロンによって大きなダメージを受け、再生中の森だという。大きな木が倒れた後に育ち始めた、まだ幼い木の藪だ。成長するにつれて木々は次第に淘汰され、生き延びた木だけが、適当な樹間を取って成長を続け、完成された森を形成するのだろう。

モンドル青年が黄葉した一枚の葉をもぎ取ると、私に渡してくれた。

「これはヒルギの葉ですが、噛んでみてください」

葉は楕円形でツバキの葉のようなつやと厚みがある。口に含むとかなり多肉質で噛みごたえを感じる。

「なんとなく塩気があるな」

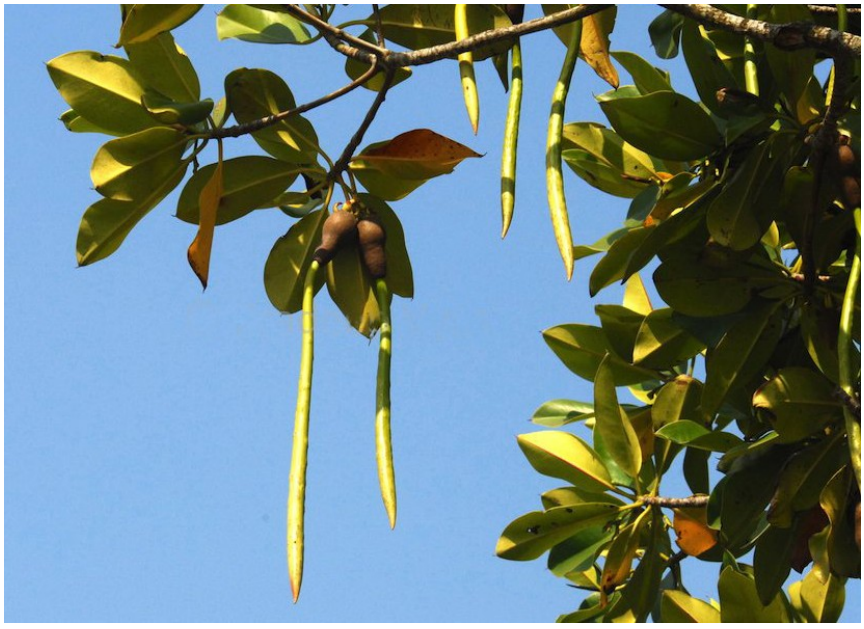
「そうでしょう。吸い上げた塩分はある程度溜まると、その葉を落とすことによって体内から排除するんです。緑の葉の間に黄色い葉がところどころにあるでしょう。あれが散る葉です」

そういわれて茂みを見ると、黄色く変色して落ちそうな葉があるし、足元には落ち葉がある。塩分濃度の高い土壌で生きてゆくためにマングローブは葉から汗のように塩分を排出したり、たまった塩分を葉ごと切り離したり、根が水分を吸収するときに塩分をろ過したりと、さまざまな戦術を駆使しているのだ。

「あの大きな木の上の方を見てください。長細いものがぶら下がっているでしょう。あれはヒルギの種なんです」

「ほぉ、グリーン・ビーン（インゲン豆）みたいな長細いサヤの中に種がたくさん入っているのかな」

「そうじゃぁないんです。種は茶色のひょうたん型の部分です。あの莢みたいな



部分は種から新芽が出た状態なんです。種ができても一年近く枝にぶら下がっていて、その間にその種から根が伸び始め、芽まで出すんです。下に落ちて泥に突き刺さり、すぐに成長を始めるための戦略ですね」

動物の場合は、孵化した子供がそのまま体内で母親から栄養を供給されて育てられ、成長した後に体外に出る胎生という育て方があるのは知っていたが、植物でも同じようなことがあるとは知らなかった。厳しい生育環境の中で、次世代にできる限り有利なサバイバル能力を与えようという戦略なのだ。

いずれのマングローブも、すぐれた適応力という共通の特徴を持っている。すべては高い塩分濃度と通気性の悪い土壌という過酷な環境で生き延びるための戦略なのである。吸った水から塩分をろ過する仕組みと、驚くほど複雑な根がその適応力の源だ。すべてのマングローブの森は一歩、歩けばひとつの不思議に出会う。

ヒルギの枝をかき分けながらしばらく進んでゆくと、突然開けた場所に出た。クマルさんが、銃を腰だめに構えながら、ちょっと待てと、後に続くものたちに合図する。前方は地面が小高く盛り上がっており、そこだけ木がまったく生えていない。トラはこのように周囲を見張ることができる場所に静かにうずくまり、獲物を狙うチャンスが来るのを待つのだという。不用意に近づくと危険なのだ。彼は周囲の安全を慎重に確認した後、わたしたちに従うように手を振った。

「モンドル君、この土の盛り上がったマウンドはなんだね」

「ここは昔、塩を造っていた痕です。干満の差を利用して海水を取り入れた塩田で、天日で水分を蒸発させます。その塩分濃度の高いかん水を、ここで土器に入れて煮つめ、塩を造りました」

「昔というのはいつ頃の時代かな」

「正確には分かりませんが、三百年から四百年ぐらい前だと推測されています。

一六九九年にシドルのような大規模なサイクロンによって、すべての施設が破壊され、それ以後、放棄されたといわれています」

足元を見ると赤茶けた土器の破片がたくさん転がっている。「伯方の塩」で有名な愛媛県の伯方島を訪れたことがあるが、製塩のための土器が地中からたくさん出土するという話を聞いたことがある。

シュンドルボンは、乾季はほとんど雨が降らないし、製塩のための薪にはこと欠かない。現在より塩の価値が高い時代ということを考えれば、こんな辺鄙な場所に来てまで、塩造りに取り組む価値は十分あったのだろう。

土器の破片はいずれも小さく、原型を想像できるような破片はない。拾い上げて、泥を落としてみると、かなり薄い。熱が早く伝わり、沸騰しやすくするために薄手になっているのだろう。また外側は模様もなく粗雑だが、内面は滑らかだ。水が漏れてしまっては、それまでの苦労が水の泡になってしまうから、慎重に磨いたことが想像できる。

土器の破片をいじっていると、マウンドの周囲を歩きまわっていたクマルさんが、突然「トラだ、トラだ」と言いながら私を手招きする。マウンドは、トラの待ち伏せに好都合な場所と聞いていたので一瞬緊張する。

マウンドを駆け下り、小枝を手でかき分けながらクマルさんのもとに向かう。木々が生い茂る森の奥に動くものがないか探しながら「トラはどこだ」と声を殺して尋ねると、彼は足元を指さした。彼の指さす先の地面に、はっきりとした足跡が残っている。一目でトラの足跡と分かる明瞭な跡だ。トラの足跡を見るのは初めてだが、ネコの足跡に似ているし、ネコよりずっと大きいからトラに間違いないだろう。足跡は土器が散乱していた小高い場所から、森の奥の方に向かってついている。やはりマウンドで獲物を狙っていたのだろうか。

「クマルさん、いつ頃のものだろう」

「今朝のものではないな。しかしそんなに古くはない。恐らく昨日か一昨日ぐらいのものだろう」

クマルさんは自分でいまつけたばかりの靴跡とトラの足跡を見比べている。いまつけたばかりの靴の跡は、泥の中からにじみ出て来た水分が多く、光っているが、トラの足跡は乾燥して、少し白っぽくなっている。

「この跡を見ると、指が四本のように見えますが、五本じゃないんですか」

「トラの後ろ足の爪は四本だよ。しかし、この凹んだ部分は爪ではなくて、柔らかい肉のパッド（肉球）だよ」

言われてみれば、ネコの足の裏には、毛が生えていない柔らかい肉の部分があ

る。その部分がクッションの役割をして、足音を忍ばせて歩くことができる。待ち伏せ型の猟をするトラも、歩くときは爪を体の中に格納し、音をたてないようにして獲物に近付くのだという。

正確な統計はないが毎年シュンドルボンでトラに殺される人は二十人から三十人と聞いた。なぜトラは人間を襲うのだろう。モンドル青年によれば、縄張りを

誇示するためのマーカーが満潮時の潮で洗い流されるため、縄張りの中に入って来るものをすべて敵とみなして攻撃する、と専門家が書いているのを見たことがあるという。モンドル君自身の説は、たびたび襲うサイクロンによって何千もの人が川に流され、その人肉を食べたトラが味をしめたのではないかというものだ。

見通しの悪い森の中だけに、トラがどこかに潜んでいるのではないかという気がして、話をしていてもなんとなく落ち着かない。ベンガルトラの疾駆する雄姿をこの目で見たいと思っていたが、こちらに向かって走ってこられてはたまらない。

その時、クマルさんが、「静かにしろ」とみんなを制し、銃を構えた。シカがおびえて鳴いているのだという。近くにトラがいる証拠だ。クマルさんは威嚇射撃をするからと皆を下がらせ、銃のセレクターレバーを外すと、空に向けて一発発射した。銃声がこだまし、森は静まり返った。

稚エビ漁の村

シュンドルボン国立公園の中は、自然保護のため、人間の居住が禁止されている。しかし、その周辺には約二百五十万人が暮らしており、直接的、間接的にシュンドルボンに関わっている。シュンドルボンがもたらす恵みは木材、屋根ふき材、薪、蜂蜜、魚、エビなど多岐にわたる。一九八九年以来、自然林の伐採が禁じられているため、木材は不法伐採の押収されたものや、立ち枯れ木が主なものだ。

現在もっとも注目されているのがエビ漁である。バングラデシュには約十二万人のエビ養殖漁民が存在しているが、養殖のためのエビの稚魚を、シュンドルボン近辺の川や入江で集めている人が約二〇万人もいる。

シュンドルボンを目指した一昨日、アロッコル号から眺めたジョイモニーという漁師の村はこのエビの稚魚を獲る漁師の村だ。帰りがけにはぜひ立ち寄ってみたいと、アロワ船長に頼んでおいた。

セラ川とパシュール川に挟まれた鶴のくちばしのような長細い陸地を縁取るように、堤防代わりの土を盛り上げた幅二メートルほどの道路がU字形に走っている。建物は道路の両側の低い部分に数本の柱を立て、その柱と道路の縁に床を渡した杭上家屋だ。川の水が増水した雨季には、杭は水中に没するのだろう。

道路の両側は、住居の他に簡易食堂や雑貨屋などが、隙間なく建ち並ぶ。わたしの感覚からすれば、建物と呼ぶより、小屋あるいは屋台と呼んだ方がぴったりする程度のみすぼらしい建物だ。

上陸すると、子供たちにたちまち取り囲まれた。バングラデシュでは十五歳以下の子供が人口の三分の一を占めている。就学年齢の子供たちもいるのだが、学校

へ行っているようには見えない。バングラデシュの初等教育は六歳から十歳までの五年間で無償だ。政府によれば、就学率は年々上がって来ており、二〇一五年には98パーセントと発表されている。しかし、経済成長に伴って貧富の格差が拡大しているし、地方と都市では大きな差がある。

「ミラン、この村には小学校はないのか。この子たちは学校へ通っていないのか」

ミランは、比較的年かさの男の子にいくつか質問すると、わたしの方を振り返った。

「ここから一・五キロほど行った隣村にNGOが運営している学校があります。この子は十二歳で学校は終わったといっています。他の小さな女の子は通っていないようです」

政府の統計では初等教育はかなり高い就学率を誇っているではないかと、ミランに聞くと、学校に登録してあっても途中から行かなくなる子供が相当いるという。教科書は無料だが、通学するための靴やノート、鉛筆は自分で買わなければならない。貧しい家庭では親自身が教育を受けていない場合が多く、教育に関して関心が低いから、子供に対して通学より子守などの仕事を優先させる。この村の現状を聞くと、政府発表の98パーセントという数字はあまり信用できなくなる。

「セラ川の対岸を見てください。森が広がっているだけで、建物なんかまったくないでしょう。ここはシュンドルボンの隣接地で居住禁止地区です。住民はみんな不法に住み着いているんです。だから政府にとってここの子供はいないことと同じなんです」

この村は二〇〇七年と二〇〇九年のサイクロンでほとんど壊滅し、何人もの死者を出したのだという。だが水が引くとすぐに人々は戻って来た。人口密度の高いバングラデシュでは、土地を持たないものが安全な場所に家を建てるのはむずかしいのだ。

家は壁も屋根もニッパヤシで、地面に直接、板を並べて床にしている。基礎もなく、杭や柱はあまりに細い。サイクロンといわず、ちょっと強い風が吹けば、崩れそうな家ばかりだ。川の縁に立っているのだから、増水期には流れによる浸食の心配がいつも付きまとうだろう。

子供があまりにも多いので、駄菓子屋で飴玉を買って配ることにした。昔の日本の駄菓子屋さんにも置いてあったような。透明な丸い瓶に入った飴玉を売って

いたので、瓶ごと買うことにした。日本円で千円ほどである。

飴玉を配り始めると、子供だけでなく、サリーをまとった母親らしき女性もたくさん集まって来た。

「ミラン、子供と女性ばかりで男がまるでいないじゃないか。男はどうしてるんだ」

ミランは家々の隙間から見える川の方を向いて「仕事に出かけているからですよ」と指を指す。

パシュール川の方を眺めれば、確かに青い網を仕掛けたたくさんの小舟がところ狭しと浮かんでいる。

「仕方ない。女性に話を聞くしかないな。あの赤ん坊を抱いた女性がいい。ミラン、名前と年齢を聞いてくれ」

ミランはしばらくその女性と話をしていたが、わたしのほうを振り向くと、ちょっと困ったような表情を見せた。

「あまりよそ者が来ることがないから、不審がっていますよ。話を聞きたいといったら、難しいことは分からないから、いやだといっています」

「むずかしいことなんか聞かないよ。まずここの電気と水はどうなっているか聞いてくれ」

ミランはわたしが持っていた瓶から飴玉をひとにぎりすくいだすと、その女性の手の平に押し込んだ。

「電気はないようですね。ランプを持っています。ソーラーを設置している家が何軒かあるといっています。水は池の水を濾して飲んでいます」

「池の水といったって、濁っているし、あれで飲めるのかね」

「いまは渇水期で、池の水が減っているし、汚れもひどいようですが、浄化して使っているんでしょう。雨季になると雨水を貯めて使うようです」

この村は、道路だけが二メートルほど盛り土され、高くなっているが、それ以外の土地の高さはほぼ川と同じだ。盛り土するために掘った後は一段と低くなっており、そこに泥水がたまっている。その泥水を炭と砂でろ過して使用しているという。

ミランは、私が知りたがっていることをだいぶ理解して来たので。私が質問する前に女性と長々と話し込んでいる。

「以前は井戸水が使えたんですが、サイクロン以来、塩辛くなって飲めなくなったといっています。きれいな飲み水を手に入れるには、ここから三十分ほど歩いた共同井戸まで行かなければなりませ

ん」

わたしが話を聞いたのはミザールさんという三人の子供を持つ母親だ。彼女は川べりにある自分の家を指して、「川が増水すると、いつ家が押し流されてしまうか、いつも心配している。河川の浸水によりわたしの家族はいつも脅かされている」と話してくれた。

生きてゆく上で最低限必要な電気、水、燃料さえも、まともに得られないこの土地に、人々がしがみついているのは、エビの漁場に隣接しているからだ。十年ほど前から、エビの養殖は急速に拡大した。バングラデシュにとって、エビの輸出はアパレルに次ぐ第二の産業でGDPの5パーセント、輸出総額の4·7パーセントを稼ぎ出している。

塩害で米の収穫がおもわしくないシュンドルボン周辺では近年、水田が次々とエビの養殖池に代わっていった。当初は規模も小さいものだったが、いまではインドの西ベンガルからミャンマーへと広がるベンガル湾沿岸地帯における巨大産業へと成長したのである。

それに伴って、稚エビの値段も高騰した。川で稚エビを取り、養殖池用に供給する仕事が、割のいい仕事になったのである。人々はゴールドラッシュのように、稚エビが獲れる川に集まって来た。電気も飲み水もないジョイモニー村の人口は、一万三千人を超えている。

「エビ漁は男の仕事で、女はやらないんですか」

「わたしは子育て、料理、糞集め、薪拾いで手いっぱいさ。しかし、いまどきの若い娘はエビを集めに川に出るよ」

「女性も船に乗るんですか」

「船を持っているおんななんかいるもんかね。おんなは川の浅いところを歩きながら、持っている網で稚エビをすくうん

だ。うまくすれば、一日二〇〇タカぐらいにはなる」
「川は深そうですが、危なくないんですか」
「怖いのはワニだね。波や風で足をすくわれて、溺れるものもたまにはいるよ」
「あなたの旦那さんは、いま漁に出ているんですか」

「潮が引いた朝のうちがいい仕事ができるんだよ」
「女性にお金を貸してくれるグラミン銀行を知っていますか。この村の女性で、グラミン銀行からお金を借りている人がいますか」
「知らないね。金を借りたって返さなきゃいけないんなら、借りるおんななんていないよ」
　ミザールさんには、もっと話が聞きたかったが、抱いていた子供が泣き出してしまった。ミランの話では、ミザールさん一家はもともとモングラで農家の小作をしていた。自分でも小さな水田を持っていたが、それだけでは生活できなかった。そこで、その土地を売って、五年前にこの土地に移って来たのだという。土地を売った金で、小さなボートと網を買い、稚エビ漁に乗り出した。生活は楽ではないが、以前の雇われ仕事に比べれば、ずっと良くなったと話してくれた。
　突然現れた外国人に、村人は最初は警戒心を隠さなかったが、子供に飴玉を配ったり、赤子を抱く母親と長々と話し込んだりしているうちに、すっかり気さくに近寄って来るようになった。なかには家の中から手招きする人もいるので、中を覗いてみるのだが、驚くほど何にもない。もちろん一間しかないから、寝室と居間と台所の区別もない。
　板の間にむしろが敷いてあり、その上に刺し子のサリーがあるのが寝る場所だろう。灯りはランプひとつだ。男の腰巻や子供の服が二、三枚、壁に掛けてある。床には水をためておく大きなポリタンク、

鍋などの炊事道具、食器などが転がっている。それだけだ。

炊事は家の外の道路や川岸でする。泥を固めた常設用のかまどか、コンクリートブロックのようなもので作った、持ち運び可能なかまどが使われている。燃料は牛の糞や板きれ。家の裏の河原に、ヤシの葉か竹で目隠しをした一平米程の小さな囲いがあるが、恐らくそれが便所だろう。

人間の基本は衣食住、あるいは食って、放って、寝るだ。この三要素が分かれば、暮らしぶりが見えてくる。残るは生業である。ほとんどの男がエビ漁にたずさわっていることは分かっている。誰か男性をつかめて話を聞きたいが、大抵の男はいま漁に出ている。船の修理をしている男たちがいたが、大工で漁はやらないといっている。

道路から川岸まで下りてみるかと思いながら歩いて行くと、パンジャビを着てイスラム帽をかぶった年配の男性が杖をつきながら、向うから歩いて来た。ミランから声をかけてもらって、早速話を聞くことにした。

「立派な髭ですね。お歳はいくつですか」

「七十ぐらいかな。どこから来たのかね」

「日本です。知っていますか」

「知ってるよ。いい国だ。津波が来ると恐ろしいがな」

「エビの漁はやりますか」

「わしは向こうのモスクの管理人だ。エビの養殖をしているが、漁はしない」

「すると稚エビを買う立場ですね」

「そうだ。人工ふ化させた稚エビもあるが、天然ものにはかなわない。人工ふ化の稚エビは半分近く死んでしまうが、川で採れたやつは90パーセントぐらい成長する。だから天然ものは人工ものより五倍ぐらい高い。特にシュンドルボンの稚エビの質は一番じゃ」

カマールさん名乗るこの男性は、なか

なか知的な面もあるのと同時に、この辺では金持ちといっていいかもしれない。懐から紙巻きたばこのパッケージを取り出してわたしに勧めたからだ。

「漁はどんな風にするか、ご存知ですか。あの青いのが網ですよね」

「そうだ。獲り方は簡単だ。網を仕掛けておけば自然に稚エビが中に入って来る。それを待って網を引き揚げるだけだ」

「たくさんの船がいますが、一日にどれくらい獲れるんですかね」

「最近は漁師が多くて、網を広げる場所にも苦労する状況だよ。昔は一日に一キロぐらいは獲れたが、いまはその三分の一も獲れんじゃろう」

カマールさんは、ときどきひげを撫でながらゆっくりと話を進める。

「獲った稚エビはどうするんですか」

「この先のジャイマニゴルという村に市場がある。そこに仲買人たちがやって来る。稚エビはクルナからバゲルハット周辺の養殖池に売られて行くんじゃ」

エビ漁について話が聞けただけでなく、養殖の話も思いがけず聞くことができたので、このままカマールさんについて行き、彼の養殖池の様子を見たいと思ったのだが、用事があるからと断られてしまった。

彼の養殖に関する話をまとめると、次のようなことになる。まずバングラデシュではエビのことを「チングリマーチ」と呼ぶ。その中でも、ここで獲れるような汽水エビを「バグダ」と呼んでいて、ブラック・タイガーのようなエビらしい。ほぼ一年中、養殖が可能で成長速度が速く、三ケ月のサイクルで成長するので毎

月出荷が可能である。エビ養殖の収入は一ヘクタールの池で、年間約八〇〇ドル程度になる。

この収入は農家にとってかなり魅力的で、稲田を養殖池に転換する農家が増えているが、塩害など環境面の心配も出てきている。一方、淡水エビ（ゴルダ）は成長期間が長く、出荷するまで九カ月かかる。手間はかかるが、環境的なリスクが少ないし、汽水域以外の内陸部でも養殖ができるメリットがある。

子供の群れを引き連れ、幅二百メートル、長さ一キロほどの村をぐるりと一周した。恐らくこの村は、貧しいバングラデシュの中でも、さらに貧しい村なのだう。全国津々浦々に支店を持つと豪語していたグラミン銀行も、この村まではさすがに触手を伸ばしていなかった。しかし、貧しいけれど、悲惨ではない。村の住人の顔は穏やかで、ゆとりさえ感じられた。

それは、この村の稚エビの漁業がもたらす収入によるものだろうか。高級食材のエビの需要は所得水準と大きくかかわっているといわれるが、中国の台頭など世界的にエビの需要が高まっているのだ。円建てでみた産地調達価格はこの二年でほぼ二倍になったという。

このバングラデシュの片田舎の貧しい村が、エビを通して世界と繋がっているのだ。エビは加工され、冷凍され、世界中に輸出されて行く。そしてその一部は、フライやてんぷらや寿司などとして、日本の食卓を飾る。日本は世界有数のエビ輸入国なのである。わたしはこれからエビを食べる度に、貧しいバングラデシュの川辺の村を思い出すに違いない。

エコ・ツーリズムの村

船に戻ると、アロワ船長が、エコ・ツーリズムを熱心に推進している村があるから行かないかと聞いて来た。アロワ船長もミランも、ジョイモニー村には上陸したくなかったようだ。同胞として、あまりに貧しい状況を外国人のわたしに見せたくないといった雰囲気が感じられた。

船長推薦の村は、川沿いのごく普通の村だが、NGOの指導でエコ・ツーリズムの理念のもとに、観光客を積極的に誘致しているらしい。「ぜひ訪ねてみたい」というと、ミランは申し訳なさそうに、日本円で五千円ほど出してくれないかという。村の人たちが集まって、歓迎の踊りや歌を披露したり、村のリーダーが案内役を務めたりするという。歌や踊りの観賞はあまり気が進まなかったが、わたしひとりのために村人が何人も集まるのだから、五千円ぐらいは村への寄付と考えて了承した。

アロッコル号は再びパシュール河を北上し、今度はセラ河の半分ほどしか川幅のない狭い川に入って行った。川の両側には畑が広がり、川の土手では山羊がの

んびり草を食んでいる。村の船着き場に着いた時には、きれいな衣装に身を飾った女の子や楽器を持った男性ら数人の村人がすでにわたしを待っていて、歌を歌いながら歓迎の花輪をかけてくれた。

「こんにちは、わたしはダンマリー村のマタボール（世話役）のチョードリーです。案内役を務めますのでよろしく」

マタボールというのは、選挙で選ばれた役職ではなく、地縁集団のなかで実力があり、かつ尊敬もされている人物がなる地域の世話役のようなものだ。チョードリーさんはこの村を訪れる観光客の案内係を務めるだけあって、流暢な英語をしゃべる。

「ダンマリー村はサイクロンで大きな被害を受けました。わたしも家を流されたひとりです。リリーフ・インターナショナルというＮＧＯの援助で、いろんな復興計画がいま進んでいますが、観光客の皆さんに来てもらうエコ・ツリーズムもそのひとつです」

「この村は漁業の村ですか」

「もちろん川で漁をしているものもいますし、エビや魚の養殖もおこなっています。稲作や野菜の栽培も盛んです。この村の特徴は多くの住民が、シュンドルボンの森から得られる資源に依存していることです」

「シュンドルボンの森はすぐ近くなんですか」

「村の外はすぐ森です。わたしたちはそこから、木材やニッパヤシや蜂蜜を得てきました。森の木を切り、畑や養殖池に変えてきました。しかし、森を保全し、環境を守り、持続可能なやり方で森のめぐみを利用してゆくことにしたのです」

チョードリーさんは、わたしの先に立って、村内を案内し始めた。彼がまず案内したのは、「バンビビ」という神様を祀る祠だった。

「中央の美しい女神がバンビビです。シュンドルボン一帯でイスラム教徒にもヒンドゥー教徒にも信仰されています。森の中で遭遇するいろいろな危険から、わたしたちを守ってくれます。とくにトラは大きな脅威です。わたしたちは森にはいるときは、かならずバンビビに安全をお願いします」

「そんな強そうな神様には見えないですね。人形みたいにかわいい。しかし、あなた方はムスリムでしょう。このようなアイドル（偶像）の崇拝はまずいんじゃないんですか」

「ベンガル人はソフトなムスリムです。自然すべてにスピリットが宿っていると考えています。バンビビはわたしたちを守ってくれる森のスピリットなんです。毎年一月十五日には村をあげての盛大なお祭りがあります」

バンビビは昔からシュンドルボンの周辺の村々で広く信仰されて来たらしい。森に入る人たちにとってトラの恐怖は現実的だ。

トラは獲物が油断して、背中を向けたときに、背後から襲う習性があるので、蜂蜜採りにとってはもっとも恐ろしい存在だ。シーズンの四月から六月にかけ、十人前後のグループで手こぎボートに乗り、島々を移動しながら蜂蜜を集める彼らは、一カ月近く森の中で暮らすことになる

シュンドルボンに蜂蜜採りに入るには、入域料を支払い、管理事務所の許可を得ることが必要で、毎年約三千家族がこの過酷な作業に従事していると報告されている。蜂蜜は一瓶（五〇〇グラム）で二百タカ（三〇〇円程度）で売られている。彼らは一シーズンで。三万円ほど稼ぐといわれるが、文字通り命がけの仕事である。

この村の人々にとって、シュンドルボンは身近な存在でありながら、一面では恐るべき存在でもあった。四季折々に実りをもたらすとともに、時として命をおびやかすことさえあるのだ。森の奥に神か、はたまた魔物がひそんでいる。そのような畏怖こそが、バンビビ信仰の出発点となったのだろう。この後、村の人たちによって演じられた歌や芝居を見たのだが、いずれもシュンドルボンの恵みへの感謝とトラに代表される恐怖を表現したものだった。

チョードリーさんが、次にわたしを案内したのは、リリーフ・インターナショナル（RI）の援助をもとに、村の人々

が始めたいろいろな事業の現場だった。

「この建物は、女性たちがミシンの使い方を勉強し、地元で栽培されているジュートを使ったバッグや座布団カバーを作っています」

「この建物やミシンはリリーフ・インターナショナルの援助によるものですか」

「そうです。こちらがシュナタさんです。彼女を初め十人ほどがダッカでミシンの使い方を習って帰って来て、いま指導者となっています」

年齢はいくつか、夫がいるのか聞いてくれとミラン頼んだが、遠慮しているようだ。バングラデシュでも初対面の女性の年齢を聞くのは、ぶしつけだと思われるようだ。

「ジュートは二酸化炭素の吸収力が普通の木と比べて五〜六倍あり、地球温暖化を抑制する働きがあります。焼却処分しても有害な物質は一切出ないですし、環境に優しい。しかも強くて丈夫なので、ショッピングバッグとして好評です。お土産にいかがですか」

ショッピングバグには事業化を手助けしたNGOの名前「RELIEF」のロゴが入っている。

「リリーフ・インターナショナルのスタッフは、いまでもこの村にいますか。話を聞いてみたい」

「いまはいません。村人が自主的に運営しています。しかし、ダッカにあるオフィスからスタッフが年に何回かやってきます」

リリーフ・インターナショナルは、脆弱な環境に暮らし、災害によって大きな被害を受けた人々が、再び復興の道を歩めるように援助する世界的なNGOだという。Rーの特徴は、緊急的な支援にとどまらず、災害を受けた地域が長期間にわたって発展できるように、草の根的な支援を行うこと。一九九〇年の設立以来、五十カ国を超える国々で、災害時の緊急支援と復興へのアドバイスを行って来た。ダンマリー村への援助も二千か所に上る援助地点のひとつというから、かなり大きなNGOだ。

Rーの援助で造られた観光客向けの宿泊施設も見せてもらった。ニッパヤシや竹など地元の材料を使い、村人たちが協力して造ったという。現在、二部屋分の施設が完成している。この村も、先ほど訪れたジョイモニー村と同じく電気はないから、エアコンも冷蔵庫もテレビもない。しかし、家の中に入れば木の香りがするし、竹で編んだ壁からは風がよく通る。部屋の中は、カンナの削り跡が荒々

しい木の椅子とテーブル、それにやはり木製のベッドがあるだけだ。

庭の脇には、高さ約六メートルの木の上に造られた家「ツリーハウス」もある。

「この村には自然のほかに何にもありません。村人たちと交流する、鳥の声を聞く、風を感じてリラックスする、そんなことをここに泊まって味わっていただきたいのです。お食事は、地元で採れるカニやエビや魚を食べてください」

ツリーハウスに登ってみた。すぐ近くを村の名前の由来にもなったダンマリー川がゆったりと流れている。子供たちが水しぶきをあげながら泳いでいるし、土手では山羊がのんびりと草を食んでいる。その向こうはシュンドルボンの森だ。

ここに泊まり、朝日とともに目覚め、山羊たちと一緒に村を散歩し、子供たちと川で遊び、昼食の後は午睡を楽しむ。夕暮れは、女たちの夕食作りを手伝い、そのおすそ分けを楽しむ。そんな生活を何日続ければ、わたしの体から酒気と毒毛が抜けてゆくだろうか。

チョードリーさんが最後に案内したのは、サイクロンのシェルターだ。コンクリート造り二階建ての立派な建物で、強風と高潮に耐えられるように頑丈に造られている。

「これは日本の無償資金援助によって建てられました。サイクロンのときの住民の避難場所ですが、普段は小学校として使っています」

「授業はいま行われているんですか。できたら見たいな」

「子供たちも喜ぶと思います。ぜひあなたから子供たちになにか話してください。わたしが通訳します」

わたしが訪れることは事前に生徒たちに知らされていたらしく、教室に入る前から、子供たちの大きな声が聞こえて来

た。教室には電気がないが、高い天井と大きな窓から差し込む光で明るい。窓を全部開けると暑いらしく、雨戸を日除け代わりに半分閉めた状態だった。

十人ほどの生徒たちが、元気よくわたしを迎えてくれた。机の上には教科書が開かれており、いままで勉強を続けていたようだ。

「ここでは生徒たちになにを教えているんですか」

「ベンガル語の読み方、書き方を中心に教えています。まず読み書きができることが基本です。わたしたちバングラデシュ人にとってベンガル語はとても重要な言語です。もちろん算数、アルファベットの読み方、書き方なども教えています」

バングラデシュはベンガル語を守るために戦い、独立を果たした国である。かつてパキスタン領だったバングラデシュは、パキスタンで話されているウルドゥ語の使用を強制されていた。ベンガル語を公用語とするための言語運動が、ダッカ大学の学生たちによって起き、パキスタン軍と衝突したことがきっかけで独立運動に火がついたといわれる。その日を忘れないために、全国各地に言語記念塔（ショヒッド・ミナール）が建てられ毎年、記念日には何万人もの人が訪れ、献花を捧げるほど言葉に対する思い入れは強い。

机の上の教科書を見せてもらった。中身はベンガル語で分からなかったが、カラーのイラストや絵がふんだんに載っており、紙の質も悪くない。ベンガル語は読めないが、数学の教科書なら中身が理解できるだろうと思い、小さな女子の教科書を見せてもらった。絵を使って九九の計算を勉強しているようだ。

「ベンガル語で九九の計算はナムタといいます。数字はローマ数字とともにベンガル語標記の数字も使われます」

英語の教科書もあった。レベルは日本の中学校で学ぶものより難しそうだ。会話を中心に勉強しているようだ。チョードリーさんから、子供たちになにか話してやってくれと言われていたので、日本から来たと話し、日本について知っていることをまず聞いてみた。

最初に挙がったのは日本製の自動車だ。バングラデシュが輸入する車の90パーセントが日本製の中古車だけに、車といえば日本の代名詞になるようだ。「HIROSHIMA」や原爆についても習ったことがあるという。

そして子供たちに一番人気はやはり「ドラえもん」だ。「ドラえもん」は二〇

〇八年、日本文化を海外に広める役割を担う外務省の「アニメ文化大使」の初代大使に任命されている。忍者ハットリ君も人気のようだ。テレビはまだ家庭には普及していないが、村の駄菓子屋に置いてあり、その前でみんな一緒に見るのだという。わたしが小学生だった頃の郷里の状況と同じだ。

「わたしは日本から来ました。日本人はバングラデシュの人と同じように、お米と魚が大好きです。夏はここと同じように暑いですが冬は寒くて雪が降りますし、水が凍ります」

「日本は戦争に負けたので、わたしが子どもの頃は貧しい国でしたが、みんなが良く勉強し、働き、豊かな国になりました。みなさんも勉強して、お父さんやお母さんを助けてください」

子供たちは真剣なまなざしで、わたしの話を聞いてくれた。彼らにとって、学ぶことは希望なのだと感じさせられるようなまなざしだった。教材は教科書以外になにもない。先生も足りない。筆記用具もノートも不十分。そんな中で、彼らは懸命に学んでいる。幼い心にも、生きて行く上で最低限、身につけなければならない知識があるのだということを承知しているのだろうか。バングラデシュでは、小学校へ通学するのが当たり前の日本のような環境にはない。ましてや中学校はもっとハードルが高い。五年間の小学校を終えて、中学校へ進学することができる子供は三分の一程度だという。

二時間ほど村のあちこちを巡ったが、村人と話す機会があまりなかった。チョードリーさんの案内は小学校で終わりだというので、ミランを連れて村内の普通の農家を回ってみることにした。刈り取りが終わった田んぼがあるので、稲作農家の話を聞いてみたいと思いながら、埃っぽい農道を歩いて行くと、大きな積み藁がある家がある。積み藁の奥を覗くと、庭で上半身裸の男がなにか作業をしていた。

「ミラン、あの男に声をかけてくれ。あんな大きな稲藁の山が四つもあるから、かなり広い田んぼがあるに違いない」

「そうですね。屋敷も大きいし、それに納屋の中に耕耘機もありますよ。中に入って大丈夫ですよ。行きましょう」

ミランはわたしの先に立って、野菜畑の畝をまたぎながら、敷地の中に入って行った。男は切り落とした木の枝の片づけをやっていたのだが、ミランが声をかけると、怪訝そうな顔で振り向いた。ル

ンギを巻いただけで、上半身は裸だが、引きしまっていて黒光りしている体は、いかにも年季の入った農夫といった感じだ。長い白いひげと胸毛が印象的だ。

「忙しそうですね。日本からシュンドルボンを見に来たものですが、少し話を聞かせてくれますか」

「ああ、いいとも。一休みしようと思っていたところだ。農業関係の人かね。お茶をごちそうするよ」

「いや、この村のエコ・ツーリズムの様子を見に来た観光客ですよ」

男はサイヤドさん、七十二歳。愛想のよい笑顔を浮かべると、家の中に入って行った。妻にお茶の準備をするように命じているようだ。バングラデシュでお茶をごちそうになろうと思ったら、三十分は最低待たなければならない。電気ポットにいつもお湯が湧いている国ではないのだ。かまどに稲藁と薪を用意し、水甕から柄杓でやかんに水を汲み、おもむろに薪に火を入れる。煙にむせながら火吹き竹を使い、手際が良くて沸騰するまで三十分である。

「ミラン、お茶は断ってくれ。奥さんに手間をかけさせては申し訳ない」

ミランがお茶を辞退すると、それではココナツジュースを飲めという。ココナツジュースは、甘ったるくてあまり好きではないが、断るばかりでは失礼だろうと、いただくことにした。

サイヤドさんが、再び家の奥に向かって大声で叫ぶと、今度は息子らしい青年が顔を出した。青年はサイヤドさんの指示に頷くと、鉈を持って庭の一角にある椰子の木に登り始めた。

鉈で穴をあけくれた椰子の実に、口を付けると、果汁は少し青臭い香りがしたが、甘さの中に少し塩気が感じられてなかなかの味だ。土中の塩分濃度が高いので、果汁も塩気を帯びるのだろうか。

「サイヤドさん、あの稲藁はいつ収穫したものですか」

「二か月前に収穫した分だよ」

「何に使うんですか」

「細かく切って、畑に埋める。土のためになる。余ったものは業者が買いに来る」

「田んぼはたくさん持ってるんですか」

「この村では、わしが一番多いよ。椰子の畑もあるし、ＮＧＯのリリーフの薦めで実験的に野菜も作っている」

「どんな野菜を栽培していますか」

「じゃがいも、とまと、なす、おくら、にがうり、きゅーり、しょうが」

サイヤドさんは指を折ながら、まだいくつもあるぞというそぶりを見せる。

「この時期は田んぼはお休みですか」
「雨が降る四月まではお休みだ。乾季作をやるやつもいるが、わしはやらん。雨季作をやればそれで十分だ」
バングラデシュは高温多湿で、季節により降水量が大きく異なる熱帯モンスーン気候だ。いまの時期、十二月から三月にかけては雨はほとんど降らない。雨が多いのは四月から十月。川の水位が上がり、田んぼに向かって栄養分に富んだ水があふれだす。
ミランによれば、雨季作には二つあり、雨季前半の四〜五月頃に田植えをするアウス稲、雨季後半の八〜九月に田植えをするアマン稲があるという。アマン稲は収量も多く、味も一番おいしいのでもっとも人気がある。
最近では灌漑設備が普及し、乾季に栽培されるボロ稲の生産も増えている。しかし、井戸や揚水用のポンプが必要なうえに、雨季のような栄養分に富んだ水が流れ込んでこないために、肥料が必要なことから、この地域にはまだ普及していないらしい。つまりここに積んである稲藁は、八〜九月に植えて十二月に収穫したアマン稲のものということだ。

「一エーカーでどのくらいの収量がありますか」
「だいたい千五百キロだな」
一エーカーは四反歩である。農水省発表の平成二十五年度の反当たり収量は全国平均で五百四十キロだから、一エーカーでは二千百六十キロ。肥料や農薬をたっぷり使う日本の約七割の収量があるとは立派なものだ。
「脱穀は自分でなさるんですか」
「この広い庭でやる。うちには機械があるからな」
「稲刈りや脱穀は家族でやるんですか」

「たくさん人を頼む。この田んぼの稲を全部刈り取ったらいくらという風に頼むんだ」

「一日いくらという決め方ではないんですね」

「そうだ。早くやっても、ゆっくりやってももらえるお金は同じ。さっさと終わらせて次の仕事をやれば、それだけ収入も増える」

「なるほど、脱穀した籾は、この庭に干すんですか」

「そうだが、その前に村の共同加工場でシッドする」

「ミラン、シッドて、どういう意味だ」

ミランはどう翻訳したらよいか、言葉が見つからず、そのまま私に伝えたようだ。しばらくサイヤドさんと身振り手振りで話を交わしていたが、分かったと右手を大きく頭の上で振ると、わたしの方に向き直った。

「シッドは水に浸して、煮ることです。蒸気で少し蒸した後、大きな鍋に一晩か二晩漬けます。それを取り出して、ムシロを敷いた庭に干すんです」

「えぇー、バングラデシュでは籾を蒸すのか。ご飯になっちゃうじゃないか」

「いや、ほんの三十秒ぐらいだから、柔らかくなるまではいきません。ベンガル語で、刈り取った後の籾をダンといいます。そのダンを蒸したのが、シッド・ダン、それを脱穀したのがチャル、炊いたご飯はカワサキさんもご存じのバートといいます」

「日本では籾のまま蒸すなんてことは聞いたことがないな。なんかメリットはあるのかな」

「米粒が硬くなって、籾殻が取り除きやすくなるようです。カビや菌，害虫の発生を抑えて、保存にも役に立ちます」

籾がついたままの米を加熱するなどということは、日本ではありえないし、わたしはまったく知らなかった。しかし帰国後、精米技術について調べた結果、籾

または玄米を水に浸し加熱処理することをパーボイル加工といい、アジア・アフリカ諸国では一般的な加工方法であることを知った。

サイヤドさんから聞いたときは、おかしなことをする、何か特殊な用途の米を作っているのかと疑ったが、「パーボイル加工は米の粘り気を取り、食べやすくする」という一文に出会って納得した。インドやバングラデシュの米がパサパサして粘り気のないのは、加工法や炊き方にもよるのだ。ちょっとぬか臭い臭いがするのも、加工時にぬかの臭いが米の内部に移るからだ。しかし、加熱によってぬか層にふくまれるビタミンBが米粒内部に移行して、米の栄養価が向上するというメリットもあるようだ。

世界有数の米食い人であるベンガル人が、米を食うのにおかしなことをするはずがない。その土地にあった、合理的な米の食いかたをしているのである。濃厚な汁料理トルカリと一緒に食べるにも、副材料とともに炊き上げるビリヤニにしても、粘り気のない米が好まれる理由があるのである。

積み藁の話から、脱穀の話まで米作りについて、長々と話し込んだ。サイヤドさんの奥さんが、一度は辞退したお茶も出してくれた。米作りの話が途切れたのは、わたしがかわいい娘さんを見つけたからだ。目が大きくて、太いボーイッシュなまゆ毛の形がいい。唇も肉感的だ。まだ二十歳そこそこだろうか。

サイヤドさんの一番下の娘さんだという。最初は恥ずかしがって下を向いていたが、笑顔でカメラを向けると、自然なポーズで応じてくれた。後で分かったことだが、この娘さんはサイヤドさんの第二夫人との間にできた子供。母親はすぐ近くに住んでいて、兄弟の所に遊びに来

たのだ。

たまたま出会ったサイヤドさんは、村一番の金持ちらしいが、総じてこの村は、先ほど訪れた漁師の村、ジョイモニィーより豊かなようだ。それはやはり自分の土地を持っているからだろう。ジョイモニー村のように、道路の一部を不法占拠して、家を建てているのでは、地方政府も退去を求めこそすれ、税金を投入してのインフラ整備は行いにくい。NGOも援助の手を差し伸べにくい。

ダンマリー村は貧しいには違いないが、住民は自分の敷地や農地を持ち、守るべき地域文化があり、リーダーを中心とした自治の仕組みがある。

大きなクルーズ船を借り切り、二泊三日のシュンドルボンの旅を楽しんだが、大枚をはたいた価値は十分あった。シュンドルボンの美しくも不思議な動植物たちに出会ったこともさることながら、NGO援助大国といわれるバングラデシュの一端も垣間見ることができた。船を下りれば、人口密度世界一の喧騒がまたわたしを待っているだろう。